

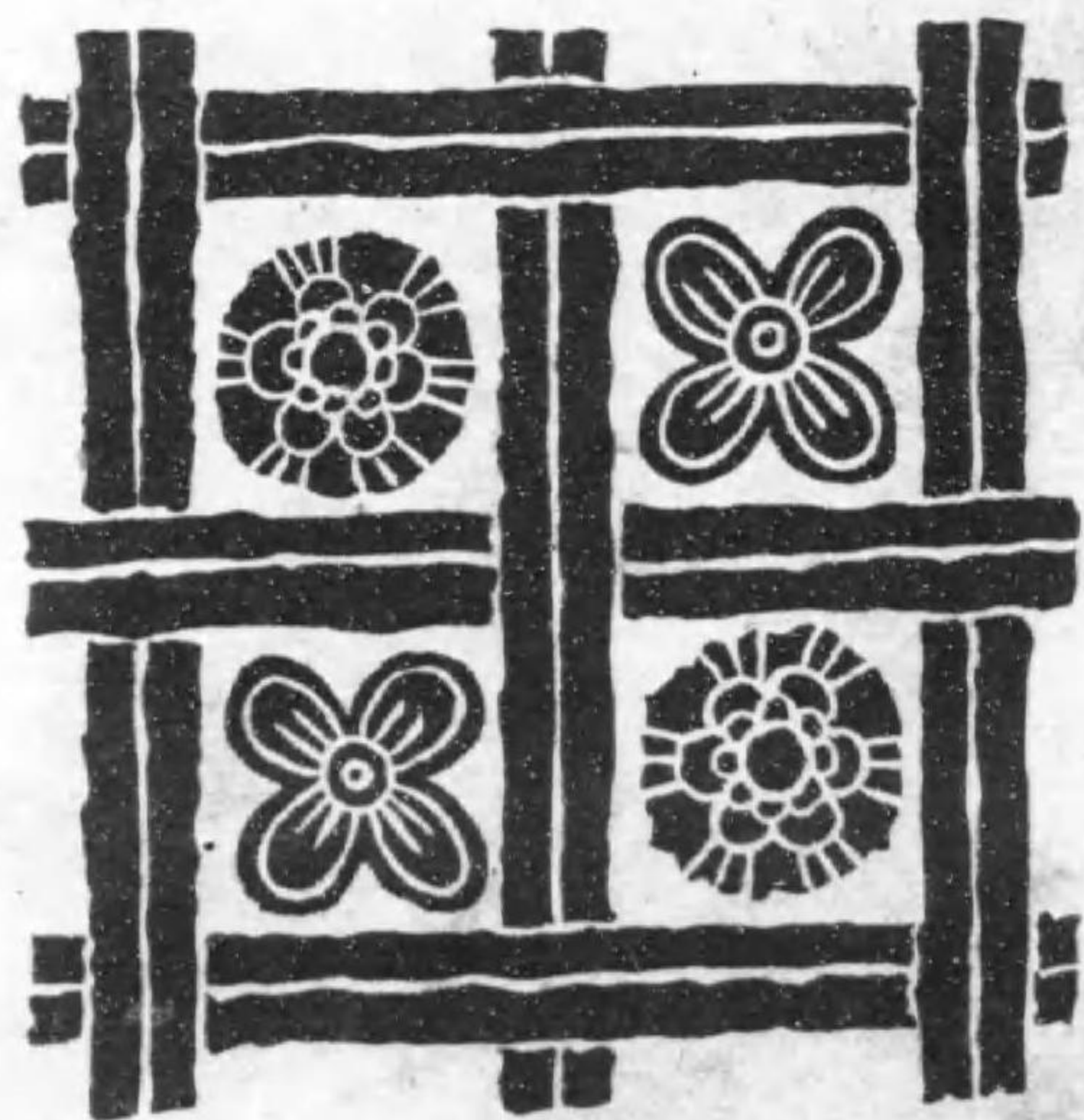
る送に性女

特 220

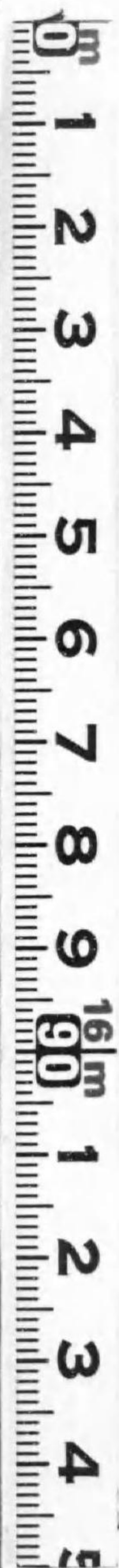
436

士博學醫

著啓 谷田三



館文同



始



特 220
436

る 送 に 性 女
主 博 學 醫
著 啓 谷 田



館 同 文 庫
子 十

はしがき

永劫より永劫に續いてゆく天地にくらべると、五十年の人生はまるで野末の草の葉に置く白露の果敢なさに似て居る。人間はこの白露に似た生活をくり返して居るのである。生れては死に、死にては生れる。我等の祖先も斯くあつた。我等の子孫も斯くあるに違ひない。

しかし、果して人間は白露の運命と同じであらうか。朝の日が照ると忽ち消えてゆく白露の姿が人間の姿であらうか。佛陀にしる、耶蘇にしる、孔子にしる、彼等の生命は世界の光として今も輝き渡つて居るではないか。これは佛陀と耶蘇と孔子の三人に限られたことではない。日本にも澤山立派な人物がでて居る。英雄、豪傑、學者、發明家、宗教家、其他の方面にも。

白露で終る人生なら何も萬物の靈長と謂はるゝ筈はない。人類社會に多少とも貢獻してそれが後世まで及ぶところに人間の尊さがある。

人間には白露に見ない尊い魂が宿つて居る。この魂を魂として愛し、磨き、光らせ、太らせてゆくのである。これが魂の持主の務めである。

魂の持主が魂を忘れてたら辨當を汽車の網棚に忘れたのと同じことである。わがもてる魂はわがもの、如くにしてわがものではない。宇宙からの授かりものである。大切にすべきである。これが魂を尊ぶ所以である。

尊い魂はけがされてはならぬ、傷けられてはならぬ。魂に錆が生じたり、破れたり、崩れたりしてはならない。

幾萬圓もする陶器の茶碗は誰でも大切に取扱ひ、十五錢の茶碗はどんざいに取扱ふ。以ての外のことである。人の魂はたとひ貴人でも賤人でも、富める人でも、貧しい人でも差別なしに貴いはずである。腐つた魂ならどれほど貴人であつても、清い乞食の魂に劣るであらう。

魂の持主よ、所有者よ、我がもてる魂を尊敬して、強い自信のもとに、明い道をひたひきに進み行かうではないか。女性は人類の母であり又母の候補者である。人類の母は魂の母とも謂へる。わが魂を愛しわが魂を磨くことは人類史を輝かせることにもなるのである。

昭和十五年十一月三日

著者

目次

はしがき	一
選ばれたらその道を行け	一
子を出世させた母の言葉	八
人生果して苦か樂か	二二
偉い人と善い人	二九
涙の尊さ	三三
人間の金米糖	三四
黄金ピカピカ	三六
興亞事業に女性の手	三〇
北京の天使	三三
石の上に築く王城	三九

心と心	四
相愛するこゝろ	四九
六道の辻に立つ青年	五一
幸福一〇〇パーセント	五二
貧と富に轉ずる工夫	五九
修養に老若なし	六二
あれでもなし、これでもなし	六八
車中の青年男女	七三
母の感激子の感激	七八
捨てらるゝもの	八〇
七轉び八起き	八五
ひがひな	八八
母となる人へ	九三

女性に送る

選ばれたらその道を行け
 植物がどれもこれも櫻になりたいと希望して、櫻一式になつてしまつたら、植物界はどうなるか。松もなければ竹もなく、梅もなく、檜もなく、杉もない妙なものになります。

人間も男ばかりだつたり、又女ばかりだつたら世界人類が滅亡してしまひます。男と女とで、人種をいつまでも繼いで行くのです。男に生れたら立派な男になり、女に生れたら立派な女となる修養をしなければなりません。

人間には貧もあります。富もあります。貧は貧に居る道を知り、富に居るものは富に處する道をしるのが肝要です。貧にあつて貧に在る道をしらず、富にあつて富に在るの

道をしらなかつたら大變なことになる。

人の境遇はいろいろです。勝手氣儘な注文をすると際限はありません。また勝手氣儘なことを望むと、時にはその通りにゆくこともあります。それはほんの一時で、遂には全く反對の結果になることも少くありません。

立派な配偶者を得たと喜んで居ると急に失策したり、又急に死んでしまうことがあります。

與へられた境遇はこれを捨ててはなりません。たとひ主人が急になくなつてもその位置を守る必要があります。又不具の人が世に多くあります。眼の見えない人、手足の利かぬ人、耳の聞えない人、言葉の出ぬ人など。斯かる人々は誰でも避けようとしません。しかし皆が皆まで好かぬと言つて配偶者になる者が無かつたら一生獨身生活です。それが天の思召でせうか。配偶者を求める際には次の三條件が大切だと私などいつも申して居ます。

一、丈夫の身體の持主

二、明るい頭腦の持主

三、輝く品性の持主

少くともこの三つは結婚の大切な條件だと申して居ます。しかしもし天の命とならばたとひ不具であつても、病人であつても、甘んじてその配遇となる決心を有することが大切だと思ふのです。即ち天命とならばたとひ火の中、水の中でも飛んでゆくといふ決心が要るのであります。天命に従ふ心は非常に尊いものであります。

ここに紹介する筑波根詩人の夫人多喜子の如きは正しくその一人であります。

筑波根詩人とは横瀬夜雨と呼び特異の存在でした。彼は四十歳の時妻多喜子を迎へたのです。夜雨は幼少にして脊椎カリエスに罹り、遂に歩けなくなつたのです。彼の詩集「花守」や「二十人宿」は悲戀の情切にして多情の少女がどれほど血をわかしたかわかりませぬ。その中にはこの不自由な詩人の半身となることを望んだものもあります。周囲の反對で一つも成就しませんでした。夜雨はそのさびしさを「よろこび」といふ歌集に収めて居ます。

たとひ汝王の後に召さるともひざまづくべきわれと思ふや

わが涙血となりて落ちむあまりにも賊そとはれてし心なるゆゑ

これは夜雨が裏切られた女に對する呪ひの言葉でありました。そして彼は幾度か家人の眼をぬすんで自殺しようと思つてました。ところが其當時文學少女であつた多喜子は萬難を排して病詩人の妻となることを決心し、周囲の反對を押切つて夜雨のもとに参りました。

多喜子は夜雨との間に三人の子まで授けられました。貧しい生活の間に血のせるほどの努力をつみました。夜雨が五十七歳になりました時、肺炎に侵されたのです。死の床についた夜雨は夫人を枕邊から離れさせず、心の底から

「實に幸福であつた。」

と再三繰返して満足を述べたといふことです。病が進んだとき

「多喜ですよ、わかりますか。」

とき、と

「わからなくてはならないと思ふが……」

と答へたのが愛妻への最後のさゝやきであつたのです。

多喜子は十八年の間よく病夫に仕へ、彼のよき半身となつて彼に希望ある人生を送らせました。

多喜子が短歌に志したのは十七歳の時で、夜雨に縁のできたのもこの時代です。あまりの不運に對し、湧き出づる同情の熱誠が遂に彼の半身になる覺悟をしたのです。病者の妻としては實に苦難の生活でしたが、決してそれに倒れるほどの弱い心の持主でありませんでした。良人の世話、臺所、農作、作詩と讀書の手助け。まことに眼の廻るほどの生活でした。

男でも女でも不具を好むものはありませぬ。選りに選つて我が配遇者を求めます。しかし三國一の配遇者を求めて結婚しましても、死の悲しみが間もなく襲ふこともありませぬ。又不慮の禍が押し寄せてくることもあります。夢にだに思はなかつた毒杯をのまされることもあります。天の配劑は實に人の豫測を許しませぬ。

多喜子は花恥しい少女時代の身を以つて薄幸なる貧しい詩人の妻に好んで行きました。親も他人もこの勇敢なる少女の行動を無謀と嘲り、飛んで火に入る夏の蟲と豫言しましたそして後悔する日の來ることを申合せたやうに言ひました。ところが事實は全く反對でした。多喜子は病者のために天上天下只一人の理解者、看護者、親友となりました。そして死の外にせん術なしと思ひつめた詩人に完全に望みをもたせました。生かしました。幸福だと感ぜさせました。勇敢にしてまた熱愛の女性といふべきであります。斯かる眞劍なる少女の心を思ふとき、私は實に言ひしれぬ同情の念にみたされます。兩手と一脚とを失つた中山龜太郎君の細君となつたのは當時十八歳の小娘でした。この肩揚の漸くとれた位の少女が進んで中山君の半身になることを決心した。これを聞いた私などは涙を流さんばかりによろこびました。そして私達は非常に安心したのです。勝手氣儘の女性ならどうして不具者の妻になることを望むでせう。どの女もどの娘も悉くその心持で居たら兩手のない片脚だけの中山君は永へに不自由の身を以て獨身生活を續けなければならなかつたのです。天にも地にも捨てられた思ひを以て淋しい此世を送

らなければならなかつたのです。

しかし天は故なく人を殺しませんでした。十八歳の小娘は中山君の細君として選ばれたのです。彼女は實に天命を知つたのです。そして何の不平も申しませぬ。既に今日の平和の家庭を設け、その間に愛兒をすら興へられて居ります。裕ゆたかではないにしてもまことに圓滿な生活をして居ます。

夫唱へ妻之に和す家庭生活は人間眞の快樂の宿る處であります。婚期に臨んで居る娘が世にいくらでもあます。婚期が後れてあせつて居る人たちに敢て告げたいことは、

天が人間に與へた位置はそれがたとひ危い場合であつても甘んじて其位置を守る覺悟が要る
といふことでもあります。

どうせ人世です。暴風も吹く、暴雨も降る。地震も火事もあります。晴れた日ばかりでは植物は枯れます。そのため雨がふるのです。人間も幸福ばかりであつたらきつとだ

らくしてゆきます。何處かに缺陷があるため、各人はその短所を補はんとして努力するのです。この努力が立派な人間にさせてくれるのです。

天から選ばれた職責を大切に守り、これに生命を打込むことが人生を幸福にするのです。生命を打込むことのできない人生に幸福などの宿る氣遣はありません。

子を出世させた母の言葉

先頃私は山口縣の萩に参り、伊藤公爵の舊邸を見て、追懐措く能はざるものがありました。

伊藤公は貧しい家に生まれました。この貧家に生れた子をあれまでにした母の苦心、母の努力は凡そ並大抵でなかつたことが想像されます。

公の生家を見、更に裏の方へ廻りますと椽先に一つの臺石があります。椽から庭へ下りる處にすえてあるのです。

案内者は

「これは「公の出世の石」と名づけられた由緒ある石です。」

と申しますので。そのわけを聞いて見ますと、公がまだ幼少の頃或寒い晩、便所へ行かうとして椽先の戸をあけますと、夜風があまりに冷めたい。便所は遠いし、いつそこ、でと、椽先の石の上へめがけて温い瀧水をあびせかけたのです。用事をすませて戸をしめて寢室に入らうとすると、母が、

「俊輔(公の幼名)お前は今何をしました。」と尋ねましたので俊輔は、

「邪魔臭いので、石の上へやりました。」

とありのまゝを答へました。すると母は

「そんな事が邪魔臭いやうではとても國家のために力をつくす人にはなれません。」と心と心の底から懇ろにさとされたのです。俊輔は非常に恥じました。なるほど自分は天下國家のために將來偉い人間にならうと思つてゐるのに自分のことに面倒がつて居るよう

では他人のため、社会のために、これより何倍か何十倍かの面倒を見ることはできないと、堅い決心を致しそれから再び敷石の上をぬらすことはありませんでした。爾來星霜幾十年。當時の俊輔は天晴れ大政治家になり、日夜劇務の裡に明けくれて故郷へ歸る機会もありませんでした。或時伊藤さんは久々ぶりに故里の萩へ歸りました。そして懐しい舊邸を尋ね、前記の庭石の邊りを行きつ戻りつして、何事かしきりに考込んで居られますので、お付きの人が

「閣下何事かと考へになる事がありませんか。」と尋ねました。すると公は頭を垂れたまま

「母のことが眼の前に浮んできて、追憶の涙がで、止まらない。」と申されました。恩愛の母が、強い意志の持主であつたればこそ、今日の我が身があるのだと惚かれた時、遂に思はず泪が頬を傳ふたのだと察せられます。公が十幾歳かの時、藩公の家來の家に奉公をして居られたことがあります。それは風の冷たく吹く日でした。俊輔は使に出た途すがら、あまり遠くもないので、一寸自分の

家へ立寄りました。あたゝかいお茶でものみたかつたのです。これを見た母は嚴然として言はれました。「家へ立ちよれと主人はお前に命ぜられましたか。」

「いえ。」
「それなら、いくら近くへ來ても、無斷で我家へ立寄るやうなことをしてはなりません。早く御主人のお家へお歸り。」

恐ろしい母の見幕に俊輔は寄りつく島もなくすごすごとして我家を出てゆきました。母は我子をしたゝか叱つて追ひ歸したものの、道がに胸がつまつて涙が出てきます。後から我子の歸つてゆく姿をながめながら涙を袖で拭ふて居りました。すると向うから來原良藏といふ武士が参りました。そして俊輔の泣いて居るのを見て何やら問答をして居ます。しばらくして來原は俊輔を伴つて來ました。

來原武士の言ひました。
「俊輔君の身の上は私にお任せなさい。立派な人間に屹度させてごらんに入れます。」

今まで泣いて居た母の涙は喜びの涙に變つたといふことです。梅檀は双葉より香ばしと言ひます。どうせ優秀な頭腦の持主でありましたから、凜として侵すべからざる特性がほのめいて居たに相違ありません。しかしいくら天才兒でも優秀兒でも害蟲のつくことがあります。玉に曇りのかゝることがあります。天才を天才とし、玉を玉としたのが公の母堂の偉いところではあります。人間意志の貴さをよく體得した仁でないと幼童の心に深い印象を與へることができません。

人生果して苦か樂か

人生は果して痛苦の世界でありますか。ひかしベルシヤのゼミキルが王位についた時、國內の學者を集め

「王學を修めるには人類史が大切だから早く精密なる人類史を編めよ。」と命令を下しました。

學者達は早速玉の命を奉じて人類史の編纂にかゝり、二十年を費して五百卷の書を十二頭の駱駝に載せ、宮廷へ運びました。若かつた王様も年をとられ、氣力も衰へて居られたので

「余は人生の半を過ぎ、残る半生にこの書を読むことはできない。もつと短く書き改めて持參せよ。」

と再度の命令を下しました。

學者達は更に二十年を費し駱駝三頭に乘せて書物を運びました。すると王は

「余は年寄りて讀書の餘日がないから更に書き縮めよ。」と命じました。

そこで學者達は又十年を費し、象一頭の脊に人類史をのせて捧呈しました。王はその時既に氣力が極度に衰へて居ましたので

「更に書き縮めよ。」と命じました。

學者達は五年を費して只一卷の人類史を献じました。その時は王は臨終の床にあり、學者達を眺めて

「余は汝等の努力による人類史を一度も讀まずにこの世を去らねばならないのか。」
と言つて歎息されたといふことです。そして五十五年の間人類史の編纂に没頭した學者の一人で最も年をとつたのが王の傍に参り

「では私が人類の歴史を只の三語で申上げます。」
と言つて答へたのが次の文句です。

「人は生れ、人は苦み、人は死す。」

斯くてベルシヤ王は死の間際に人類史を學ばれたのです。五十五年の研究の結果がこれです。

この物語は佛の評論家アナトール・フランスの書いたものです。フランスは一九二一年に文學者としてノーベル賞金を得た人で、死んだ時は國葬にされた程の文豪でした。面白い物語だと思ひます。

これが人間の運命だと思つてあきらめてしまへばそれで文句はないのですが、慾があつたり、望みが起きたりしてなかなか容易に諦めがつかないのです。

「何とかして苦をのがれる工夫はないか。」

と地球上の人間は皆もがいて居ます。

しかしよく考へて見ると考へ方によつてはまだその反對にもとれます。

「人は生る、人は樂み、人は死す。」

とも考へられます。この世が楽しいと思へば實際樂しく見えます。笑つて鏡を見ると笑顔が鏡に映つてくるのと同じです。

苦といひ樂といひますが、結局は自分の考でどうにでもなるのです。他人が苦みだと申しましても本人は平氣のことがあります。他人は樂だと言つても自分はそれで苦るしんで居ることがあります。

もつとも公平に見たら人生には苦も樂もあるのです。故に

「人は生る、人は樂み苦み、遂に死す。」

とでも申すのがいいかも知れませぬ。只問題は苦みに處しては苦に倒れず、樂に處しては樂に耽らぬことでせう。苦を苦として倒れたら萬事休すです。

樂を樂として耽つたら樂が逃げてしまひます。貧しい時は貧しいときの心がけを失はず、富んだ時は富んだ時の心を失はないがよろしい。病氣の時は病人の心持、健康の日は健康人の心持で居たら間違ひはありません。

無理をするから苦が起ります。無闇にうまいものを食ひたい、無闇に遊びたい、無闇に美服をききたいと望むから苦がつかまよふのです。それではいつになつても苦が逃げてゆきませぬ。

人間は四季を一生として迎ふる旅人と同じやうなものです。風吹く日もあり、雨のふる日もあります。春風の匂ふ時があるかと思ふと、霜おく秋の夜があります。暑い夏があるかと思ふと、木枯しよく寒い冬の日が訪れてきます。

夏には暑さに處する道を考へ、冬には寒さに處する道を考へるのです。小さい蟻でもせつせとよく働きます。他日に處するための苦勞です。

人間は苦樂の衣服を着て人生といふ道を歩いてゐる旅人です。衣服には必ず裏と表とあります。外に見える方が表で、肌につく方が裏です。この裏と表を苦樂と考へたらよろしい。表だけの着物もなければ裏だけの着物もありませぬ。苦だけの人生もなければ、樂だけの人生もありませぬ。

「あの人の生涯は徹頭徹尾苦みの生涯でした。」

などと言ひますが、よく考へて見るとそんな生涯は一人もありませぬ。乞食でも矢張苦樂を併せて味つて居ります。その證據に

「乞食三日すれば忘れられない。」

と言ふではありませぬか。

夜の次ぎには晝が来る、晝の次には夜が來ます。苦と樂もそんなものです。

既に人生に苦樂の兩方面のあることが明かとなつたら、それを活かして用ひるのがもつと賢い方法です。泣くのも人生です。笑ふのも人生です。悲み、喜びながら正しい旅をしてゆくことが大切だと思ふのであります。苦しい間にあつても強い奮闘心があつた

らそれに乗越せませす。鐵壁のトーチカを破り難攻不落のマチノ線を突破すると同じです。勿論死線を超ゆるほどの苦難が伴ひます。この苦難に勝つてこそ大きな樂が到來するのです。

古から樂を望んで樂を得た例はありません。樂は苦を征御した後自ら轉げてくるのです。樂は飽食暖衣を意味するものではありません。これを樂の對象と考へたら滅亡です。坐して食へば山をも空しです。樂はよく働き、よく遊び、よく食ひ、よく眠るところにあるのです。

人は苦樂の眞の意味を正しく認識して間違のない用意をすることが肝要です。現代の人間は東の間の快樂を眞の快樂のやうに見做す傾向があります。これは眞の樂ではありません。酒に酔ふ氣分が樂ならそれは間もなく醒めてしまひます。眞の樂は我も樂み、人も、國も樂むものである筈です。

偉い人と善い人

「偉くなれ」、「偉くなれ」と父も母も教師もコドモに教へてゐます。これは金持になれ、大學者になれ、大將になれ、大臣になれ、大發明家になれとの意味であります。もちろんこれを悪いとは申しませんが、偉くなつた筈の人が飛行機の墜落したやうに不慮の禍を見ます。大臣やら、大政治家やら、大實業家やら、大學者やら、大富豪やらが、刑務所へ入つたりすることが多過ぎるほど實例を見せつけられます。

日本の教育は個人主義の思想にかぶれて利己の精神が伸びすぎて善とか仁とかを忘れ去た姿になりつゝあります。「偉人になれ」とは申しますが「善人になれ」とか「仁者になれ」とかは申しません。學課の點數さへよければ教師も父兄も満足してゐます。そこで最高學府を出た人々の中から時として罪人がでゝきます。偉くはなつたが、仁や徳を教へることを忘れて居たためです。今日學校の修身など記憶の道德です。實行の道德ではあり

ません。善くなることが人生最大の目的なのです。法律の網さへくゞれば悪いことをしても儲つたらいゝのだと平氣で口に出す人すらあります。

日本の現状は個人の成功をやかましく申して、地位とか、名譽とか、富とか、權勢とかに眼がくらみ、人間本來の尊い姿を忘れて居る形です。

競争は人の世に脱れません。又競争があつてこそ物事は進歩するのです。しかし他人を突き倒しても自分がいちやくゴールインすればそれでいいと考へたら間違ひです。スポーツにしてもスポーツ道徳がある筈です。不正の手段で勝つても、正しい勝とは見なされません。却て排斥されます。義理も人情も構はず造つた資産や位置が葉末の白露の如くに消へ去ることは人生の常です。

「仁者になれ」、「善き人になれ」これが將來の教育方針にならなければ佛畫いて魂を入れないのと同じです。

今日の家庭教育を見るといかに「偉い人」になれといふことに重きを措かれて居るかがよくわかります。母の子に對する願ひは點取競争に勝つことです。平均八點より九點

に、九點より十點に進ませることが眼目です。席次が五番から三番へ、三番から一番へ進めば母は勝ち誇る勝軍の心持になれるのです。相當の教育を受けた母の態度がこれですから他は凡そ知るべきです。

偉い筈の人間がどうしたことか偉くならず、才物が落伍者になり、天才が早死したりします。無闇矢鱈の詰込教育、自暴自棄に導く教育、高慢うぬぼれ教育などの形になつて小學校時代に賞められた子が後には天下の笑はれ者になつたり、甚だしきは社會の厄介者になつたりするのです。子の兩親わけでも母親は目前の誇りのため愛兒の前途を誤つてはなりません。

偉くなるには先天性の素質が要ります。だれでも大の字のつく人間になることはできません。しかし「善い人」なら誰にでもなれます。決心と努力さへあれば善い人になります。今日の社會に「偉い人」も要りますが「善い人」を求めて居ることは甚だ切實です。家庭で子どもが母の膝に居る時代から忘れてならない躰の一つは「善い人」になる修養を子にさせることです。

涙の尊さ

涙！ 笑つても出てくる涙が、熱涙に代るとき、百萬の敵を動かすほどの力になります。新渡戸博士嘗て北海道への講演旅行の際、札幌で一日だけの自由の日をつて居られたのです。その日が来ました。博士は札幌在住の際永らく博士の許で仕へた老女を、その病床に訪はれました。老女は涙を流して喜びました。

次は生後數ヶ月でなくなつた先生の唯一の子の墓を訪はれたのです。花も線香も水も供へず、雑草二、三を抜き頭を垂れて居られました。お側附の森本博士がよく見ると、熱涙が先生の頬を傳つて流れて居ました。別に手布で拭ふともなさらぬ。暫らく先生は熱い涙を直接子の墓石に落して、子の靈にそゝぎたいお心持であつたでせう。質素な墓所の前で、心の底から尊く流れる慈父の涙は、實に詩よりも繪よりも麗はしいものであつたでせう。さあ歸りませうといつて、數歩退き、又引返して墓地に戻り、頭を垂

れて、つきぬ別れを惜しまれました。

この豊平の墓地は自然で壯嚴で、神の衣とも言ふべきほど麗はしいと言はれてゐます。こゝに偉人は尊い祈りに熱い涙を流されたのです。お付きの人は、生涯に忘るゝことのできない感激を得たのであります。

あくびの時にも涙はでます。しかしその涙では何等の感激性はありません。映畫の撮影時に、女優は點眼器で水を眼の中に入れて、それをぼろぼろとこぼします。このやうな涙なら瀧ほど流れても謂はゞ蛙の面に水のやうなものです。またたとひ點眼器でなくとも、空涙といふものがあります。これは悲しくないのに悲しさを無理に表現するもので、海綿をしぼるやうに瞬きして涙をしぼりだすのです。これを一に賣笑涙と名づけます。これなら一石でも二石でもありがたくありません。心の奥底からにじみ出る熱い涙が尊いのです。人を活かすほどの涙は皆これです。

人間の金米糖

人間のうちに金米糖に似た人があります。角が多いので他人と突合ふのです。夏目漱石は

「人間は角があると、世の中を轉がつてゆくのに骨が折れて損だ。丸いものはごろごろと何處へでも苦もなく行けるが、四角なものは轉がるに骨が折れる許りぢやない。轉がるたびに角がすれて痛いものだ。」と戒められました。こんな人間の金米糖が世間に相當多く居ますが、かくては自分で自分を苦しめることになりす。

角のないのと骨のないのと一緒にしてはなりません。骨はどこまでも太くて確りしたのがいいのです。

角をとることを長所や特徴を捨てること、早合點してはなりません。長所や特徴は捨

てるどころか終世尊重する必要があります。

金米糖の刺は我儘、自己主義、喧嘩、罵り、詐り、悪評、嫉妬、虚榮などに相當するのです。いつまでもこんな角が取れないと自分で自分を刺したり、傷けたりすることになります。自分で自分を磨く心得のある人は他人の振りを見て自分の悪い角や、刺を除いてゆきます。

コドモを大勢一緒に置くと自然に金米糖の角がとれます。衣かつぎをざるに入れて振り廻してゐるといつかその衣の皮がとれて、つるつる坊主になるのとよく似て居ります。

コドモが共同生活をするとう無理が通らなくなり自然自制して角がとれます。コドモ同志接觸して居るだけでいいのです。一人子などは随分角がとれずに居ます。大人の環境がその角を増長させるからです。それが治らずに居ると自分の角で自分の身體を傷けることになるのです。人間は到底單獨で生活のできるものではありません。古歌に
世をさけて山に入る人こゝにても憂きことあらばいづちゆくらん

といふのがあります。

かくのごとく人間は到底單獨の生活ができない以上、喧嘩したり、罵合つたり、叩き合ふやうなことを避けたいものです。

個人が修養しますと自然金米糖の角はとれてゆきます。角がとれて圓滿になります。例へば張切つたゴム毬のやうにゴム毬を外方から指で押しますと、その部分は凹みまゝです。しかし指を除くとまた元の通りに膨れます。この態度になると立派なものです。いくら圓い毬になつても、もし古毬の如くになりましたら、骨なしのくらげ、見たやうなものです。

黄金ピカピカ

凡そ齒を持つ動物で口の中にピカピカと黄色の光りを放つものはけだし人間様の外にはありません。金がない、金がないといひながら、口にまで金を所有することは、どう

であらう。

金をかくしてならないのに、笑ふ度毎にキラ／＼と金が出します。これだけは統制から離れ、申告御免となつてゐるのです。金がいくら必要だと申しても、金冠を外して黙納することもできず、つまり「持てるものの悩み」であります。時によるとその金冠が外れたり、その下から病氣がのこ／＼顔出しをいたします。

アメリカのやうに金のうめいてゐる國でも人間の齒に費す金の量は左程多くないと申します。金の代用品を用ひるからです。金の少い日本と、金の多い米國とを比較してみると面白い現象です。

入齒や充填のことを話しますと齲齒のことが自然思ひだされます。

むかしは齲齒のできるのは只齒の質が悪いのだとのみ考へて居ました。つまり齒だけにその原因があるのだと思つてゐました。ところがこれだけでなく、全身的の變化や、病氣によるものだといふことが明かになりました。これは豫防にも治療にも影響するとして大に注意する必要があります。

第一に注意すべきは栄養です。栄養品にカルシウム類が缺けるか、減りますと歯質が弱くなります。そこで骨質を強くする成分を口から呑んだり又注射してみますと、骨質が丈夫になります。

この點から考へまして妊娠中のカルシウム不足は胎兒の骨質や後に齒になる部分まで不良の影響をうけることになるのです。乳齒の生えるとき、又齒の生え換る頃などの食物が骨質に影響し、他日齲齒の發生を促すことにもなるのです。

傳染病の場合もしくは物質交換の病氣、その他重病の恢復などには齲齒ができやすくなります。既に齲齒が在れば一段と悪くなります。これも全身的に齲齒に影響を及ぼす證據です。

そこで今までの考へ方より進んで全身強ければ齒も強く、全身弱ければ齒も弱いといふことを知る必要があります。齲齒のうちに潜伏齲齒と稱し、肉眼的にはよく見えないが、鏡でみると齒の面に點があつたり、裂けた溝、もしくは齒の隣接部の珐瑯質表層に齲齒が潜んでゐます。もしこの時に豫防したら齲齒を進ませることなしにすむのであり

ます。

何事でも大事に到るまでに處理をすれば割合に小さくてすみますが、手後れになつてはだめです。阿蘇の噴火山のやうに外輪だけが残つて中央が大きな孔になつてはとても充填は利きません。

齲齒が全身的の影響あることをした以上は豫防はもちろん治療も早くすることを怠つてはなりません。

局部的には年に一、二度必ず口腔診査をうけ、齒牙の清拭をして貰ふのがよろしい。うがひを正しくすることも効果があります。又ブラッシュの用ひ方などにも注意し、齒の何れの面にも届くようにするのです。齒齦のマッサージもお勧めします。

食物は冷熱共に度を過ぎてはいけません。適温は攝氏三十乃至四十度です。五十、六十度は熱すぎます。十度以下は胃に故障を起し易くなります。

全身的にはいゝ日光にふれ、カルシウム分に富む食物をとり、運動を盛にして骨質を旺盛にすることが大切です。

興亞事業に女性の手

支那の復興に女性の手がなくては到底できません。それは男だけの世界が成立たぬのと同じです。支那は今新たに生れて行くのです。男だけでは子は産めませぬ。女の腹が必ず要ります。宣撫事業は軍隊と官吏とだけではできません。

日本人から今の支那を見ますと、きたない處です。傳染病も多いし、不衛生だし、塵溜めの觀があるでせう。しかしそこから綺麗なものが生れて來ます。どぶ池の中に白蓮の咲くのと同様です。日本の女性は、この尊い白蓮になり、又支那の國民を白蓮にさせるのです。支那には我等の祖先が居るでせう。支那の文物を吾等は多く學びました。吾等の子孫は支那で骨を埋める覺悟が要ります。してみると支那を縁も因もない國と思ふことは間違です。親類でもあり縁者でもあるのです。これからは相共に手をとつて東亞の新秩序を整へるのです。大事な國、大切な民なのです。

日本の女性はこの大仕事に總動員してかゝるのです。母性がことごとく支那へ移住するといふではありません。なるほど娘や息子は支那へ遣す必要も起ります。支那の土になる覺悟で愛兒を送る必要も起つてきます。

母は日本内地の我家に居ても興亞の仕事が立派にできます。第一子女を支那へ送ることがそれです。第二には日本に居る支那の國民と交友關係を保つことです。お互に集つて談笑する機會を造ることもよろしい。支那の留學生を招待することも大によろしい。女學生をもつともつと支那から日本へ招く工夫をすることも大切です。

第三には日本から支那へ教師、醫師、看護婦、宗教家、社會事業家の女性を送ることも甚だ必要です。又使節を派遣するのもよろしい。

第四には日本内地は勿論朝鮮や滿洲のコードモに支那と親善する心懸を根本的に教へ込み、一生懸命で協力しなければ、禍が我身にくるのだといふことをよくよく知らせて置く必要があります。

最後にもつとも根本的な女性の覺悟を申して見るならそれは支那のために流す一掬の

尊い涙です。焼きつくす程の熱の炎です。支那人のために一生をさへげて悔を覚えぬ程の女性です。一人でも、二人でも、十人でも、二十人でもほしいと思ひます。百人や二百人は日本に斯様の女性があつてもいいと思ひます。支那は御承知の如く大きな國です。百人や二百人の女性がいくら熱涙を流しても、はた焼きつくす火の如き熱情があつても、それは大海の一簇などと申してはなりません。一本の小さいまつちの火でも廣い山を坊主にし、大きな街の家々を灰にするではありませんか。ナイチンゲールの如きか弱い女性の身を以てして世界赤十字事業を起すほどの底力があつたではありませんか。奥村五百子が熱火の如き至誠をさへげて、遂に愛國婦人會を起したではありませんか。げに尊きは女性の熱情であります。支那人に日本女性の熱情を移し植ゑることが何よりの急務です。抗日一天張の中國民族の心をとかして、眞から日本の眞髓を悟らせるようにするのは女性の力でできます。叩く力、打つ力、破壊する力よりも、浸み込む力、愛する力、互に交際する力が一層強いのです。政治は上下をつけてゐます。これでは眞の親善はできにくいのです。それよりも

と深い處に根を張る力が要るのです。それは個人と個人と相ふれてしがらみになることです。これが國民の精神にならなければ駄目です。少くとも女性が早くそれを考へるのです。日本の女性よ、支那の國民のために祈る精神をもつて親善を進めたいのです。それが大きな力です。

北京の天使

支那は堅く日本と握手して共存共榮の實を擧げんとして居ます。日本は支那の友邦として徹底して親善の花を咲かせたいと意氣込んで居ます。

しかし實際の問題になるとなかなか容易ではありません。國體が違ひ、國民が異つて居るのでから兩方とも大きな襟度を示す必要があるのです。

この問題を解決するには婦人の力が要るのです。支那へ英米から七千人も宣教師がき

て居ます。その大多数は婦人です。日本の婦人宣教師が果して支那へ何人行つて居るでせうか。

英米の宣教師のうちに醫師が相當多くあります。日本の宣教師や布教師の中に果して醫師が何人居るでせう。

斯かる状態ですから宣教師や布教師の大勢を支那に送ることや、又これらの宗教家の醫師を養成することも非常に大切です。日本の醫師が日支親善のために出かける餘裕はありません。

そこで我國では急に醫學専門學校を設立しました。しかしこれとて四年後に僅々八百人の卒業生を出すに過ぎません。

支那には僅か一萬數千の醫師があるにすぎません。日本では約六萬人の醫師が居て尙ほ且無醫村が三千以上もあるのです。支那四百餘洲四億五千萬人の中に一萬數千の醫師では心細いことです。日本の醫師が支那に於ける病人を診療することはどれほど喜ばれるかしれません。



北京の正陽門の繁華街と、天壇との間に、盛場があります。こゝはあらゆる罪惡の醜所です。一名小盗兒市場と名けられて居ます。不潔、雜沓、醜業、すりの雜居地で最下級の人々が最下級の人を相手に生活して居るのが、この罪惡街の光景です。

この眞只中に飛込み、ひたむきに支那の可憐なる人々のために熱と誠をさへげて一生懸命に働いて居る二人の日本女性があります。これは、昨年春から、基督教方面の盡力により設けられた愛隣館なのであります。

その日本女性の一人は愛隣館醫療部主任池永英子さんで、他の一人は同館主事の鳥海道子さんです。

この兩女史は、青春の夢にあこがれる時代を忘れ、北京に赴いたのです。そして設立日なほ淺きにかゝはらず、男の及ばぬ奮闘、犠牲的精神を發揮して居るのです。

池永さんは大分縣下毛郡大幡村池永正廣氏の一粒種の愛嬢です。東京女子醫專を卒業後、大阪の住友病院に奉職、郷里から兩親を迎へて十年、ひたすら病者のために盡したのです。

たまたま支那事變が勃發しました。周囲の男は劍を帯びて出征しました。英子さんは女の身、「男だつたら戦地へ行くものを。」と、ひたむきに軍國の奉公を考へたのでした。その時、婦人矯風會その他の信者の委員會によつて、貧民施療の愛隣館ができることになりました。

女史は好機到れりとなし、父の許しを得て決然大陸へと志したのです。

愛隣館は昭和十四年一月から施療を初めました。天橋一帯の貧民は、漂泊者が多く、言葉が區々で容易にわかりません。

半年先きに來て居た鳥海さんは、北京語は話せたが、土語がわからないのです。止むなく支那姑娘じつがわを雇つてこの人が患者の土語をさし、それを北京語にして鳥海さんに通譯、鳥海さんは日本語にして池永さんに傳へ、初めて患者の容態が明になるのです。

何しろ四百四病と申しますから、どんな患者でも愛隣館へやつてきます。眼病、皮膚病、性病、さては癩病まで。池永さんは一視同仁の心持で懸命に治療をして居るのです。外科手術までして居ます。患者は増すばかりです。今日では平均一日八十人から百

人、施療所は忙しくなるばかりです。何しろ一人で一日にこれだけの患者を取扱ふのですから、身神の疲労は大體察せられます。身も世も忘れて病人のために働くこの池永女醫の姿を神の姿と見ないものがあるでせうか。

其中、國に残した父が病床に臥し、だんだん容態が悪くなつてゆきました。父の重病と聞いては氣が氣でなく、心配でたまりません。英子さんは飛んで歸りました。父は臨終の枕下で英子さんに申しました。

「新東亞建設のため、英靈になつた大陸戦死のことを思ふと、お前を大陸の人柱に捧げるのは當然のことだ。世評などに動かされず確りやれ。」

これが最後の言葉でした。尊い遺言でした。英子さんは父の理解ある言葉に手を合せて喜びました。そしてその奨勵をしかと胸に刻み、再び勿惶として北京へ行きました。老母は内地の親族へ託しました。英子さんは昭和十四年一月から同年十月末までに延べ一萬一千二百二十九人の患者を受扱ひました。

今年三十五歳の女の身を以て日毎、日毎に百名内外の患者を診療し、その上に殆んど

毎日の如く外科手術をするのですから、並大抵のことではありません。それでも治つてゆく患者のよろこびを見ると、また元氣が出て、ほんとに生甲斐のある楽しい仕事だと申して居ます。

愛隣館主事の鳥海道子さんは、埼玉の人。東京青山學院神學部を出てのち、婦人矯風會で働いてゐたのです。偶、愛隣館設立の話とき、大陸の人柱となつて人類愛を注ぎたいと決心し、雄々しく支那に渡つたのです。

愛隣館の經營にはお金が要ります。鳥海さんは華美を夢みる少女心の恥しさをふりすて、日支人の間を奔走して、淨財を集めて居ます。

その上同じ年の十一月からは、千字學校を開き、九歳から十二歳までの男女兒三十五名を教育してゐます。又附近の女房連には、刺繡や編物、手藝を授けてゐます。

罪惡の巢窟、貧民の市場である天橋街に居をトして誠心もて勇敢に働く二人の女性は、愛隣館を中心として新生命を築き上げんとして居ます。

池永、鳥海の二女性が北京の天橋で涙と血もて一心不亂に働く心がどうして支那の國

民にしみ込まずに居ませう？ 第二、第三、第五、第十の池永女醫、鳥海女史が出てくることを切望します。

本當の日支親善は斯かる涙ぐましい日本女性のまごゝろから行はれてゆきます。銃後の女性は「偉い」と言ひ「思切つた方」だと噂するだけではなしに、彼女等のためにせめて感謝の手紙だけでも送らうではありませんか。紅茶の一杯を節約して集めたお金を送らうではありませんか。

石の上に築く王城

皇紀二千六百年は確りした基礎石であります。この上に立派な建築をしてこそ光輝ありといふものです。

神武天皇が高千穂より御出征の途につかせられて橿原に神居させ給ふまで數年間は實に言ひしれぬ悩みを嘗めさせられました。大業は必ず大苦を伴ひます。

今回支那事變に際し、我國は東亞の聖業を授けられました。この大事業に大きな苦惱の伴ふことは當然です。國民は萬難を突破することを十分覺悟せねばなりません。しかるに今日の生活をみると心細い觀が起ります。

飲食を無駄することがその一例です。辨當持參で出勤すべき人が平氣で食堂へ行きます。朝の間や正午に食堂で酒を飲む連中もあります。食堂にはコドモも大勢參ります。獨逸では戦争に参加しないうちから早くも食物に分配制度を布きました。日本の國民は戦争を始めて三年餘も経つてやつと白米から「左様なら」する位ですから、凡そ察せられます。田園地方の中學生の辨當を見ると町の子に反し自家で搗いた白米の飯を持つて來て居るといひます。

買しめ、賣惜みは何のさまです。主婦が毎日一足づゝ足袋買ひに出たり、一人で二百足も買占めたり、生れたばかりの赤ちやんの嫁入衣裳を買つた例もあるといひます。やつと公定相場ができました。今日までどんなに品物の値が鯉の瀧昇式に昇つて居たか、實に驚く狀況でありました。

東北で馬の競賣が開かれるとき、軍部の人々が例へば五百八十圓と呼びかけますと、居並ぶ人々は先づ姿勢を正し、それ以上の價値があつても、せり上げをしないと申します。明かに損をしても馬の持主は軍用馬だといふので甘んじて低い價格で辛棒するので、こゝに大和魂が残つて居ます。

お客の弱味をつけこんで暴利を貪る輩に比べると實に雲泥の差であります。

贅澤は何事です。飲食はもちろん衣裳、裝飾品など一切節約しなければ今日は困難を凌がれない秋です。高給料理屋が満員であつたり、高い衣裳がよく賣れたりする有様は何事です。

自分の金だ、自由に使ふのがなぜ悪いか。これは金を使ふ人の心理です。日本は兵隊さんを支那へ送つて今戦争して居るのですよ。同胞が異郷で血汐を流して居るのです。

或時は風凍る寒空で、或は鐵だにとける暑熱の下で、言ひしれぬ勞苦を嘗めて居る皇軍將士の身の上を少しは察しても見るがよろしい。出征して居る我子ならその子の蔭膳まで供へるではありませんか。隣の息子も、またその隣りの子も、自分の息子の延長で

す。隣村、隣郡、隣縣、さては全國の息子が自分の息子の延長です。いや自分の延長です。この人達に對して贅澤三昧をして相済みませうか。

學生は平氣で酒や煙草に親しみ、映畫へ通ひ、喫茶店でふざけちらし、有閑の徒は球場や、麻雀、圍碁クラブで尊い時間を空費して居ます。

「これでも日本人か。」

と言つてみたくなるではありませんか。

國難の到ること、今日ほど急なるはないのです。それにこの始末です。

かういふ話をすれば、

「それは大抵男のすることです。」

と女は申します。

「それなら女は引しまつた生活をして居るか。」

と反問すると、そこに又好ましからぬ現世の姿が見られます。年頃の娘達にも今日の國難がよくわかつて居ません。若い娘たちには程なく、結婚が迫つて居ます。一家の主婦

になつて日本を背負ふ大事な役目を授かるのです。主婦は一家を健全に支へて國家を安きに置くのが任務です。

田舎では時局の變りゆく様をよくは知りません。しかし働くことだけは知つて居ます。大都會には働くことを忘れて居るものが少くありません。これは不思議な現象です。遊藝も趣味ももとより全然捨てるべきではないでせうが、年頃の娘達が自分の健康を増進するためにどれだけ努力して居るか、甚だ疑はしいのです。社會でいくら考へて實行の工夫をしようと思つても、なかなかそれを喜びません。

料理や裁縫はもとより必要です。必要の點からいふと育児、看護も決して席末に加へらるべきものではありません。生花、茶の湯、音楽、舞踊などを先頭に押したて、育児や看護を後屬部隊にしてしまひ、先頭だけが前進して後屬部隊がついて來ず、コドモを生み、病人ができて初めて後屬部隊が要るのですが、さてあたりには影も形もみえません。これが今日高等女學校を卒業して後、結婚するまでの娘の生活です。もちろん職業戦線で毎日活動して居る娘もあります。田園で農事や産業にいそしんでゐる娘もあり

ます。

あれもこれも皆大切な娘です。要は娘の本分を忘れてはならぬといふことです。身のほどしらの贅澤は國を亡ぼす原因にもなるのです。

要するに一心同體になつたらいゝのです。一億一心と申してもよろしい。しかるに今日の状態は、區々の方向を向いて居ます。左向くもの、右向くもの、上向くもの、下向くもの、前向くもの、後向くもの、思ひ思ひです。そんなことで興亞の新建設がどうしてできます。政を司る人々も、教育家も、國民も、ことごとく魂の蘇生をする必要があると思ひます。指導者になる資格がなくてどうして大東亞の新秩序など主唱できませうぞ。

心 と 心

自分の靈が他人の靈に食ひ込んで行つたらそこに大きな力が生れます。大楠公の靈は

六百年の永い間日本國民の胸の中に食ひ込んで居ます。忠臣といへばすぐ大楠公が浮んでくるのはそのためであります。

母の心が子にしみ込むことも靈と靈との交りです。母が子を思ふ精神を子が悟つたらそれでいい。或人がヘレン・ケラーに

「あなたが、お母さんについて、もつとも深い思出は何ですか。」と尋ねたら、ケラー女史は立所に

「それは、私の物の言へた時です。私はもう啞ではありませんと母に申した時です。母は私の言葉をきいて私を抱きました。そしてさんざんに泣きました。その熱い涙が、私の頬に流れ落ちた時に、私は戦慄するほどに母の慈愛を感じました。」

と答へました。この尊いよろこびの精神は晝も夜もケラーの胸の中に生きてきたのです。そしてケラーは告げて居ます。

「見えぬ、聞えぬ、もの言はぬ不具の子でも母は決して失望してはなりません。正しく指導すると救はれます。私が第一その證據です。それから母の正しい愛が大切です。盲

目の愛は駄目です。」

日本のお母さんたちには頂門の一針です。ケラーは又申します。

「小さい間にしつかり、嚴格に、いゝ習慣と作法とを教へて置かねばなりません。私が母に感謝するのは教育の事一切をサリヴァン先生に任せて下さつたこと、私の健康に注意して下さつたことです。時あつて、母はサリヴァン先生が少々厳しい躰をされても一言も不平を言はれなかつたことです。」

この話をきいてもケラーの母が正しい愛の持主であり、賢明な性質であつたことがよくわかります。そしてケラーの胸にその母の愛情が燃えて居ます。人間の愛が強く正しく働くと腹を痛めて生んだ子でなくても生みの子に對するのと變らぬ程の愛が出てきます。サリヴァン先生の母性愛は實にケラーの心の底の底まで徹底しました。この徹底した愛がケラーの心を尊いものにししました。

サリヴァン先生が重い病氣にかゝり其上に明を失はれたのです。ケラーはこの先生を我母とも思つて心のゆくまゝに看護しました。盲が盲の看護をしたのです。靈と靈との

結びつきほど尊いものはありません。

妻は夫の心に活きなければ終生の最大幸福は得られません。夫の地位、夫の富と、夫の美貌と結婚したらいつまでたつても幸福の最上には達する日がありません。夫の地位が低くなり、富が失はれ、美貌が皺になつたら幸福は逃げてゆきます。妻の靈が夫の靈以外の處にまごまごしてゐるからです。夫の靈の中にびたつとくつついて居たら、地位が亡びようと、富が貧に代らうと、美貌が皺にならうと、靈と靈の結合が離れるやうなことはないのです。

コドモの母になつたら、輝く母性愛を子の靈に浸みこまさせなければ駄目です。小言を並べたり、訓戒ばかりしても却て効果がありません。眞の母性愛は叱ることに在りなどと考へては大間違ひです。母が眞剣に愛を子に注がうとすれば言葉よりも祈りです。一心に願ふ態度です。

伊藤公爵の少年時代、お母さんは近くの神社に詣で、息子が將來國に奉公をする立派なものになりますやう一心に祈られました。山室軍平さんが生れました時も、お母さん

は神に念願されたのです。山室さんの家は當時餘裕のない生活でしたから、丈夫に育てることも中々の心配でした。お母さんの態度は眞剣でした。自分のすきな鶏卵を断ちますから、どうぞ私の願を叶へて下さいと祈られました。山室さんの家は岡山と鳥根の國界で海へも遠いし、魚などは容易に手に入らず、卵が何よりの御馳走でしたから、これを断つことはそれほどたやすいことではなかつたのです。眞剣の力は偉いものです。山室さんが大きくなつて同志社に學ばれるやうになりました。だんだんお母さんも年を取り、弱つてゆかれますので、

「もう神様も願ひをきいて下さつたのですから、卵でも食べて、元氣になり、私共の行末をながく見て下さい。」と申されました。

するとお母さんは

「いやいや、それでは私の誓つた良心に對してすまないから……」と申して、とうとう亡くなるまで三十年間一個半個の卵を口にされなかつたとのことで

す。山室さんは自分のために眞剣に念願して下さるその熱情の態度を思ひ出す度毎に涙が出たと言つて居られます。母の靈が子にびつたり結びついて居るではありませんか。

相愛するところ

一家は揃つて愛し合ひ一村一町一國こぞつて相睦むのが人としての理想でせう。相愛するといふからには男も女も、若きも老いたるも、富めるも貧しきも、位置の高きも、低きも、強きも弱きも、それに差別はない筈です。

ついでこの間のことです。白痴の青年を長男にもつ親がその子を殺し、十歳になる次男を連れて親子三人心中をしようとした事實があります。もつともこれに類した實例は今までも皆無とは言へません。

しかし考へて見るといろいろの事を思ひ浮べます。思ひあまつての結果だと一概に片づけてしまふわけにはゆきません。

行末のことを考へると白痴の子は一生世間の厄介にならねばならない。それを見るのがいかにも苦しい。しかしたゞにそれ計りではない。貧しい生活では日々の衣服にも事を缺く。それで結局一思ひに殺してしまふ方が親の慈悲と思つたのかも知れませぬ。しかしそれだけではすまない。次男まで心中の伴にしようと思つたのです。想像するだに戦慄するほどの事實です。

これは單に珍らしい實例として見逃してはなりません。白痴でも、低能兒でも、不具でも、癡疾でも皆助けなければなりません。

殺すべきではありません。捨てるべきではありません。しかるに日本では斯かる恵まれない子をまだ捨てゝあるのです。全部が全部ではありませんが保護の手はまだ不十分です。同じ根から出て届る朝顔の蔓にも大きな花のみでなく、見すばらしい花も咲きます。智恵が少ないとか不具だといつて容易に人を捨てたら、捨てられる人の數は随分多くなります。神は人を捨てません。人間のみが功利的に勝手なことを考へるので、恵まれることの少ない人を愛するのが神の志を行ふことになるのです。そこに極樂

の世界、安住の世界が現れてくるのです。

六道の辻に立つ青年

高等學校の學生で或夜ひそかに劇薬をのみました。永い間眠つたまゝ目が醒めませんでした。やつとの事でおぼろげにわかるやうになりました。そして申すには、「あら、まだ死ななかつたのか。どうぞ早くこのまゝ死なせてほしい。」と言ひます。

急報によつて馳せつけた両親の驚きは並大抵ではありません。

なぜ高等學校まで進んだ學生がそんな氣になつたのでせう。學生の言ふには「勉強しても成績が擧らない。強ひてすると頭が痛んで續かぬ。こんなことでは生きて居る甲斐がないと思ひ遂ひに決行しました。」とのことです。

或とき一人の高等學校の學生が私を訪ねて参りました。數學ができないので三學期の試験をうけなかつたとのことでした。

勿論進級することはできません。さらばと言つて原級に落第生として居るのは厭だし、轉校をする道もなしその癖自分は大學を卒業したい希望なのです。本人に逢つてきいてみました。いくらか神經衰弱の氣味もあるやうでしたが、大したことはもちろんありません。そこで私は彼に申しました。

「決して失望するには及ばない、人間は永い間に一年位後れることがあつても、それに屈せず勇猛心を起して進めば、いつでも取返しがつく。心配せずに悠々とやつてご覧、後の鳥が先きになれるよ。」

その青年の兩親は長男のことでもあり、且將來を囑望して居ることゝて非常に心配して居られたのです。私は申しました。數學が不得手ならいつそ巧に指導してくれる人に頼んで見たらよからうと。するとその青年は大に活氣づいて歸りました。一晚経ちました。昨日まであれほど沈んで居た學生が、

「僕はやる。頭が軽くなつた。別の教師を頼む必要はない。時々受持の先生にみて貰へばそれでいゝ」と言ひました。親は私に

「一體どんな言葉であんな沈んだ子を快決に導いて下さつたのです。」

との問でしたから「餅は餅屋です。」

と笑ひながら答へた次第です。

女中などで猫いらすの御厄介になるものが相當居ます。勿論神經質の小さな娘に違ひありませんが、主婦の言葉が荒々しかつたり、その取扱ひに同情がなかつたりすると、いつそ死んだ方がましだと思つて、輕卒に猫いらすを服む氣になるのです。精神状態の動搖しやすい青年期は全く六道の辻に立つて居るやうなものです。青年期の惱みの多くは人生問題です。只今偉くなつてゐる人でも青年期に自殺しようと思つた人が随分あります。これ等の例を引いて青年の勇猛心を起させると打つて變つたほどの人間になり得るのです。

幸福一〇〇パーセント

「あなたは幸福一〇〇パーセントですか。」

と尋ねたら一人として「そうです」と答へる人はありません。

全智全能の神さまが何故人間に一〇〇パーセントの幸福をお與へにならないのでせう。大慈大悲の佛様でもそれができぬとなれば神も佛も少々力が足りないといはねばなりません。

全智全能の神、大慈大悲の佛様であるから人間に一〇〇パーセントの幸福をお授けにならないのです。

何故でせう？

人間ほど勝手な動物はありません。富むと富んだとて勝手なことをする。地位が高いと高いとて無理をする。健康を與へると暴飲暴食をする。美貌を與へると墮落する。優

れた才能を與へると威張る。

そこで何か不足の状態に置かないと人間は油断をするのです。そこで誰にでも多少の缺點を與へて努力させようといふのが神佛の慈悲と見るべきだと思ひます。

たとへば彼のヘレン・ケラー女史の如きは幸福一〇〇パーセントどころか幸福一〇か二〇パーセント位のところでせう。目と耳と言葉とを奪はれたら何と申しましても幸福は落第點です。この落第點は彼女をして今日あらしめるほどに努力させたのです。彼の今日から申せば不幸の一〇〇パーセントが今日の幸福に導いたのです。そうすれば彼の今日あるは不幸一〇〇パーセントのお蔭だとも言へます。禍を轉じて福となすと言ふのは全くこの事です。

古往今來、洋の東西に、随分偉くなつた人があります。大事業をした人があります。それ等の全部ではないが大多数、言ひ換へれば殆ど全部が貧乏でした。富に恵まれたら墮落したり怠けたりして努力しないから平々凡々の人になつて了うのです。貧乏が成功の資本になることは味ふべきです。

わが夫に選んだ男が決して幸福一〇〇パーセントの資格を持つて居ません。妻だつてその通りです。頭がいいかと思ふと顔がまづく、顔がいいと脊が低過ぎたり、料理が上手だと思ふと數學が出来なかつたり、踊が上手かと思ふと文字が下手であつたりして、皆が皆まで決して揃ひませぬ。

斯くの如く缺陷だらけの人間です。この男と女とが一つになつて夫婦生活を行ひ、十全を理想にして努力もし、苦心もするのです。そこに進歩を見るのです。向上も充實もそこから生じてくるのです。

して見ると不幸の多いことは幸福の多いことになる原因ともなります。禍が轉じて福になるのは斯の如きことを指すのです。

式に書くと

不幸 = 幸福

となります。之に反し幸福の身分で不幸の結果になつて居る例が多くあります。それを式に書くと

幸福 = 不幸

となるのです。實際面白いことですが事實です。それは結局努力の如何によるのです。式にすると

幸福 - 努力 = 不幸

不幸 + 努力 = 幸福

となります。

ある娘は金を多く持つことを幸福だと思つて嫁にゆきました。先方は五十萬圓の身代でした。幸福一〇〇パーセントだと思ひました。嫁いで見るとその家に借財が六十萬圓もあることがわかりました。嫁の幸福一〇〇パーセントは一轉して不幸の一〇〇パーセントになりました。

不幸にプラス努力が幸福になる以上は不幸も強ち恨むべきではありません。恨むべきは努力心のないことです。努力心があつたら男でも女でも成功します。加藤清正は

「自分が裸になつたら湯屋の三助から出發する。」

と申しました。これだけの勇猛心があつたら誰だつて必ず成功します。

夫を求めるならこの勇猛心のある男を選ぶのです。勇猛心は男にする基本です。今時の男の中には、こんにやくのやうな意志の持主がよくあります。妻に働かせて自分は寝轉んで居たかつたり、妻の持參金をねらつて居たり、金満家へ養子を望んだりするので

す。
履歴書をひろく知己へ振廻す求職人があります。始めは何でもしますと申しませんが、よく聞きただすと

「身體は強くない方だから、なるべく楽な方へ廻して貰ひたい。」

と言ひます。それから

「給料は少くてもいいか。」

と尋ねますと、

「給料は普通以上に戴きたいのです。」

と申します。これではルンペンになる筈です。加藤清正の心掛があればいつの世でもル

ンペンになる氣遣はありません。清正式の求職は給料を求めず仕事をせつせと勵むから
です。

怠けものの男を夫にしたらそれこそ百年の不作です。豊年は望まれませぬ。人生は働いて田から、畑から、山から、野から、海から收穫するのです。働くところに幸福が湧きいでゝきます。無頼漢に幸福の神は決して宿りません。又働かず平氣で衣食する人には幸福は見向きもしてくれません。さつさと素通りです。

貧を富に轉ずる工夫

心の持ちやう一つで人間は貧乏にもなり、富める人にもなります。

かつて私は唐津市の鏡山へ上りました。山上では四方が手にとるやうに見えます。靜かな海の麗はしい色、霧のかゝる島々、艇々として流るゝ川、劃然たる耕地、虹形の松原、何といふ大きな美しい眺めだらう。どんな富豪でもこんな大きな邸宅をもつ人はあ

りません。私は天下の富豪よりも一層富んだ心持で暫くあかぬ頂上の眺めに見とれて居ました。私はいつまでもこの気分ですから家は貧しくとも實際富んで居るつもりです。我が學園の北は六甲の山です。南は緑の海です。園は門も垣もありませんので山へも海へも地つきです。雲や霞、時としては銀の冠を戴く六甲山を築山と見、軍艦や蒸氣の走る海を我庭の泉水と見て居ますから、鐵筋コンクリーの塀をめぐらして威張つて居る月並の富豪より私の方が段違ひの豪者さです。その上に税金が要らないのですから尙更幸福です。私が何程失敗してもこの自然の邸園たる六甲山や海面を押壓へされたりすることはありません。又築山と泉水も盜まれる怖れは絶対ありません。富者と申しましてもピンからキリまであります。十萬の資産家も百萬の資産家にくらべたら貧乏です。

五百圓の月給を貰ふ人でも年に何百萬の収入のある人にくらべたなら大層貧乏です。かくて物質の富を追う人はいつでも富を追ひつゝ、貧をかこちながら道走る旅人です。そして結局一生涯を貧乏で暮しつゞけてゆくのです。

貧乏でも心を裕にもつと富に居ることができません。別荘などもいりません。ホテルに泊ればそれが別荘です。宅地税も、家屋税も要りません。たとひ身はさゝやかな家に住んでも月かかげが寢床を照してくれます。泥坊が這入つて持ち歸るものがないから頑丈な戸を鎖す要もありません。透明な一枚の硝子窓が屋内と屋外との境界です。そこに寝ながらにして呀えわたる月を賞でる快樂があります。「心なごく今宵は寝ねむ我が窓に映る月かかげまどかなければ」これが貧者でありながら富者以上の幸福なる心境です。

富者は家財が多いから夜中は盗人に對する警戒と恐怖心があります。番犬が吠えろとすぐ盗人でないかと眼を醒す。時には起きて家の圍りを探す必要も起るでせう。貧しきものは福です。犬が吠えても知らずに高軒で安眠ができます。

さらばとて特に赤貧を誇るわけではありません。しかし人間は無理をしたり、人情を捨て、義理を捨て、まで富をつむべきではありません。貧に勝ち富に勝ち得たらそれでいいのです。貧故に不正を働き、富故に怠惰遊逸の日を送つたら貧も富も共に罪惡です。貧に在つても貧に處する道を辨へ富にあつては富に處する道を辨へることが必要な

のです。

米の富豪カーネギー在世中、金を儲けることより金を正しく使ふことの方がむづかしいと申しました。彼が生前社会事業に投じた金額は幾億圓に達して居ます。彼はどん底の貧窮生活から身を起して一代に世界的富豪になつたのです。彼のごときは貧と富とに處する道を知つて居た人物と謂ふべきであります。

女性が物質のために生涯を臺なしにする例はいくらでもあります。又子女の教育を直に物質と結びつけ、天與の藝才を犠牲にすることも珍らしくありません。

修養に老若なし

どれほど強からうが、富んで居らうが修養の伴はぬ人は人間としての尊さがありません。修養は人間の價値をテストする標尺になるのです。

幼少の時から心掛のいゝ人は修養を積んでゆきます。煉瓦の一つづつを下から上へ段

々をつんでゆくやうに。

修養は身分とか、貧富とか、男女とか、老若とかによるものでなく、一に當人の心掛によるのであります。

雨森芳洲といふ有名な學者がありました。儒者でした。年をとつてから

日本人と生れて、敷島の道をしらないといつては恥かしい。自分も和歌の稽古をして見ようと勉強にとりかかりました。これが丁度八十一歳の時です。

翁は豫定を立て、歌の勉強をしました。

古今集を千遍よむこと

自分で一萬首の歌を作ること

右の二つの中、どれもなか／＼の仕事です。ところが精神一到何事か成らざらんやで、二年目に、古今集を千遍よみ、自分で一萬首を詠みあげたといふのです。

斯やうな實例をみると次の歌の意味がよくわかります。

なせばなりなさねばならぬ何事もならぬといふはなさねためなり

關西に大水害のありました時數人の學童を胸にだきしめて救出し、自分は尊い犠牲となつた吉岡訓導の事はまだ大方の記憶にある筈です。その吉岡訓導は十四歳の時から女工の身となり、毎日毎日激しいつとめをしながら夜は學校へゆき、餘暇には高等女學校の講義録で勉學をつゞけ十九の時には高等女學校四學年の編入試験を受けて立派にパスし、二番の成績で卒業して居ります。級長や副級長までしました。

毎日毎日學校へゆくことを仕事にして居ながら勉強ができないとて、愚圖々々いつて居る人も決して少くはありません。

修養は決して「棚から牡丹餅」のやうに、ひとりで、ころころくるものではないとて、こちらから手を出してとるべきものです。茨の中にあるか、山の奥にあるか、千里の遠方にあるか、それとも足下にあるか、それはわかりませぬ。

その證據に修養のつんだ人ほど苦難を経て居ます。つまり苦難の手が修養を掴むことになるのです。

吉岡訓導の如きも苦難の手で掴んだ修養です。かく申す私の如きも漸く小學校四年を

卒業したまゝの十一歳で弟の守をしたり、父の手傳に山や畑へ参りました。そして十八歳の時家出をするまで、忙しい農家で耕作の仕事に没頭しました。勉學は僅に夜の短い時間だけです。時計がなかつたので、何時頃まで勉學したかわかりませぬが、多分一時間か二時ごろまではやつたのでせう。盆とか、祭とか、正月とかは農家も休みです。この休日が私にどれほどうれしかつたかわかりませぬ。それは勉學ができたからでした。

十八の時に家を出て大阪の醫學校にゆくやうになりました後も餘暇に働いて居りました。故郷では日中働いて夜は勉學するのですが、學校へ通ふやうになつてからは、夜働きました。

通學は可なり遠い處からでした。自炊をしながら夜分には又遠い處へ働きにでるので、すから、時間の乏しかつたことも察せられます。夜の仕事は目と耳と口と手を一緒に働かせるものであつたといへばそれが何であつたか誰にても想像がつかます。私はその仕事をしつゝ通學して居ました。宿直の晩は夜の二時まで働き、それから寝るか、又は二時まで寝て、それから朝まで働くのでした。

いつぞや電話局で交換手の娘たちに話をしました。

「あなた達の手によつて我々が遠近の人々と容易に話ができるのです。尊い仕事です。大切なお勤めです。責任をもつてやつて下さい。」

これ等の人々に對する同情は、自分が同じ仕事をさせて貰つた體驗からでゝくるのです。それから課長に導かれて交換室を見せて貰ひました。三十年前の有様とくらべて見ると中々の進歩です。今日は大層複雑になつて居ます。従つて作業も複雑です。幾千人の若い女子が一生懸命に働いて居てくれます。涙ぐましいことだと思ひました。

働く娘に同情するだけでも、自己の體驗のお蔭です。この點から考へ、自分が學生のころ夜勤させて貰つたことの意義をつくづく回顧したのでした。もしこの體驗がなかつたら、斯かる深い同情を交換娘にもつことは到底できないのです。

思へば貧なるが故の修養でした。この點から、貧に對しても謝すべきだと思ひます。今とても時間のない身です。悠々と机に向つて書物を読む暇とはありません。しかし汽車や電車の中では、書物を読む時間があります。道を歩く時でも本は讀めます。よめ

ない時は考へることができません。人の話を讀書に代へることもできます。路傍で電車やバスを待つ暇には三行でも五行でもよめます。食堂にも、枕邊にも書物が置いてあるとそこで三分でも五分でも僅の時間の利用ができるのです。これが私に與へられたる讀書の時間です。時間のない生活をして居るから時間を拾ふ習慣ができたのです。時間があつても讀書にそれを利用せぬ人があります。本居宣長の

折々に遊ぶ暇のある人のいとまなしとて書よまぬかな

と詠じたのは眞を穿つて居ます。昔も今も同じです。

アブラハム、リンカーンは貧しい家庭に成長しました。七、八歳の頃から既に日傭賃を貰つたりして辛酸をなめました。彼にとつて讀書は何物よりも好きでした。

或日隣りの家からワシントン傳を借りてきました。大よろこびでその夜はそれを讀み更かしました。間もなく暴風雨が起り雨もりのためその本をぬらしました。リンカーンは非常に驚き、心配しながらそれを隣りの家へ返しに行き

「本當にすみません。私は三日でも四日でもお家の手傳をさせて貰ひますから、どうぞ

許して下さい。」

とお詫びを言ひました。隣りでは大層これに同情し、それには及ばぬ。それほど熱心なのなら、ワシントン傳を進呈するといつてくれたのです。

リンカーンが後に米國の大統領になつたことは誰でも知つて居ますが、彼が幼少の時、斯くまで貧しい生活の中にあつてしかも修養を怠らずに居たことをしる人は少いかも知れませぬ。梅檀は双葉より香ばしで、實際高德の人を見ると矢張幼少の時からその心掛の違つて居たことを見るのであります。

あれでもなし、これでもなし

年ごろの綺麗な娘がありました。嫁に貰ひ手が澤山ありました。しかし調べて見ると先方は帯に短かし、たすきに長しで、あれでもなし、これでもなし、その中に、一年経ちも三年経ち、五年、十年もたつてしまひました。

娘の年のゆくにつれて親も同様年をとり、行末のことが心配になり、遂には寝ても、醒めても氣に病む有様。斯くて娘が三十五になりました。もうどんなにあせつても縁談が思ふやうに参りません。

「あれでもなし、これでもなし」の人生は、この娘の如く後の日に悔をのこすことが少くありません。

一體人間に満點の人はありますまい。缺點があるから努力するのです。努力がその缺點を補ひ、弱い人もつよくなり、怠けものが勤勉家になり、不良が善良になるのです。こゝに進歩があり、満點の方へ向つてゆくのです。

たとひ貧乏であつても人物がしつかりして居たら、そこを取得にするのです。この男だときめた以上は互に相勵まして向上進歩を謀るのです。富んでは居るが人物が悪いとか、頭はいいが、醜いとか言つて「あれでもなし、これでもなし」ではいつまで経つても埒があきません。

求職の場合、給料はいゝが仕事が劇しい。仕事は樂だが給金が安い。「あれでもなし、

これでもなし」何べん職場を變へてもまとまりはつきませぬ。

青年期はよく迷ひます。

これは第一經驗に乏しいからです。東に行くか西に行くか迷ひます。人間のこゝろが迷ひだしたら制限ありません。世には醫者巡禮をする人があります。一人の醫者が肺が悪いと云ふと他の醫者にゆきます。その醫者は肺は心配要らぬといひます。そこで第三の醫者を訪ねます。今度の醫者は

「いくら肺も悪いが、胃腸の故障が主だ。」

と申します。それでまた第四の醫者へゆきます。その醫者は

「胃腸もよくないが腎臓の方が悪い。」

と言ひます。結局ぐるぐる醫者巡禮をして落つかないのです。「あれでもなし、これでもなし。」又病院へはいつて居ながら其病院の主治醫にあき足らず他から來診を頼む患者があります。現在自分の入院して居る病院の醫者に信用が置けないなら斷然退院するのがよろしい、かくて甲の病院から乙の病院へ、乙から丙へと、つまり病院巡禮をするので

す。

「あれでもなし、これでもなし。」

短い人生です。迷ふて居る間に日がくれます。「あれでもなし、これでもなし。」と申す間に人生行路の旅人は墓場に着きます。かくて迷ひの一生が終るのです。

かくいふ私も實は迷ひました。醫學校を出て

「さて、何科を専門にしようか。精神病でもなし、小兒科でもなし、さらばといつて他に適當なものがない。」

所謂「あれでもなし、これでもなし」です。そうするうちに端なくも天來の命令に接しました。その命令は

「迷ふな治療教育といふ道を行け。」

といふのでした。その命令は天來の感興でした。救ひの福音でした。

「これだ、これだ。」

と私は非常によろこんだのです。迷ひ子は正しい道をつき當てました。「四辻に道を尋ね

て旅人の行方を問ひし日もありしかな」斯くて私は専心自分のゆくべき道がはつきりわかつてからでも尙ほ且二十年の永い間仕事の準備をしなければなりませんでした。準備の後に宿望の治療教育院が與へられました。「求めよさらば與へられむ」であります。

人生の旅人に大切なのは目的地です。富士へ登るなら、富士の方向へ進まねばなりません。又いくら健脚でも一足飛に富士の頂へ登ることはできません。一合目から二合目へ、二合目から三合目への順序です。いくら性急の人でも、飛ぶ鳥でない以上は初めから七合目、八合目へ高飛びはできません。只忠實に順序を追うて登つたら必ず目的は達せられます。けれども

「富士にしようか。阿蘇にしようか。それとも淺間にしようか。」

など迷ふて居たら、十年たつても、どこへも登れませぬ。「あれでもなし、これでもなし。」人生行路の旅の者は目的を定めてその方向へまっしぐらに進むのです。どうせ途中には雨にふられ、風に吹かれることがあります。それに堪へなければなりません。人生は奮闘の歴史を布の如く織つてゆくのです。「丈夫になる」必要があり、「賢くなり」、

「立派になる」ことを心がけるのです。そしてそのため一生懸命にその目的を達する準備と工夫をします。この間に迷ふてはなりません。

「断じて行へば鬼神も避く」

断行です。「あれでもなし、これでもなし。」では断行できません。善を行ふのです。火でも水でも怖れずに進むのです。「女賢うして牛賣り損ね」といふ諺があります。「あれでもなし、これでもなし」を繰返すうちに牛を賣り損ふのです。牛ならまだしも娘の婚期を失つてしまふのです。理性に乏しく、判断に缺けた母親の意見でその子の前途に暗雲を見て居る例が乏しくありません。「あれでもなし、これでもなし」の結果です。

車中の青年男女

中年の紳士は省線姫路から下りの汽車に乗りました。紳士の横に向ひ合つて中學生と女學生とが乗つて居ました。二人は連ではありません。中學生は栗を食べました。どの

皮もどの皮も丁寧に紙の囊に入れました。それから蜜柑の皮もことごとくその囊の中に入れて綺麗に片づけて持つて居ます。

向ひ合つた女學生も蜜柑を食べました。この娘は懐中から紙を出し、蜜柑の皮と袋とを全部それに包みました。それから間もなく給仕が掃除をいたしました。そして二人の傍まで掃いてきた時に初めて二人の青年は塵の中へそれを入れました。紳士はこの二人の青年の行爲を見て非常に感じました。

その隣の坐席に先生と呼ばれて居る人が居ました。洋服の襟がよごれたのできれいなものに換えて居ました。中々容易にボタンがはいらないので、傍の人が手傳つて居ました。その間にも巻煙草を口にして居ました。時々煙草の灰が洋服のあちこちに落ちて散るのでした。そして煙草の吸殻は處さらはずにあたりに捨てました。

その横の方に幼児を連れだ夫婦が乗つて居ました。岡山驛へ下りたのですが、コドモの食べ残した辨當は紐で結びもせず、亂雑極まるまで、汽車を下りました。例の紳士はまのあたり、いろいろの光景を見せつけられ、非常に感じました。紳士の

傍に居た二人の中等學校の生徒は當然なすべきことをしたに過ぎません。特に賞めねばならぬこともないのです。けれども普通の人が殆どしないから、彼等の行動が珍らしく貴く見えるのであります。

そこで紳士は二人の生徒に學校名を尋ねました。

男は兵庫縣立第一中學校一年の生徒でした。女は廣島縣安田高等女學校の生徒でした。紳士は彼等二人に向ひ、交々申しました。

「君達二人の行爲を先程から見居たが、誠に感心だと思つた。當然の事でも多くの人はしない。それを君達はよくしました。その心懸で進みなさい。必ず成功するに決つて居る。」

時は春の四月、櫻咲く暖な日でした。紳士は愛すべき彼等二人の青年に以上のことを語り終つて相わかれ、岡山驛で下りたのです。その紳士とは姫路の東洋紡績會社の工場長であつたのです。

私は一日東洋紡績の女工千五百人に話をするこゝなり、一日を工場に過しました。



その時例の工場長からこの話をき、非常に感興を覺えたのです。そしてその二人の青年に對して頼もしい、愛すべき青年だと感じました。

或日の朝の九時ごろでした。私は大阪から京都行の三等列車に乗りました。私の乗合せた列車の中には小學生徒が一杯居ました。其列車内は蜜柑の皮と袋、古新聞、菓子ของ包紙、バナナの皮などで、まるで塵捨場のやうでした。そしてあまたの幼童は群雀の如く頓狂な聲をして騒いで居ました。誰でもこの状態を見たら平氣では居られませぬ。しかし受持の指導者の教師だけは除外例であつたと見えます。この醜態を見た私は大に憤ほろしくなりました。

教室に紙反古が落ちて居たら教師は子に拾へと命じます。毎日々々學童は學校で掃除を命ぜられて教室や廊下の清潔を心がけて居るのです。それが一朝汽車の中に入るとこの體たらくです。あきれてものが言へません。私はこの豚小屋化した列車の中に居たまらず他の客車に轉じました。あの時學校と教師の名を聞いて置けばよかつたにと思つて居ます。奈良の公園は幽邃で、春秋の眺めは一入です。ところが、土曜日や日曜日は、

大變な人出です。この公園の中には紙屑や辨當殻を容れる容器があるにかゝはらず、處かまはず物を捨てるのです。奥ゆかしい自然の風景を人間どもが汚すのです。床の間に花を生け、壁間に額や軸をかける國民が一度戶外に出ると公園であらうが、汽車であらうが、街道であらうが、劇場であらうが、まるで汚さなければ損のやうにするのです。家庭教育も學校教育もそれほど無力のものかと思ふとそゞろ哀れを感じないでは居られませぬ。人と共に楽しみ、人と共に喜ぶ性質があるなら人と共に不快をよろこぶ筈はないのです。徳は私の場合でも公の場合でも守らなければなりません。母の躰さへよければこんな公德はわけもなく守れます。今日は母自らの躰からかゝつて行かねばならない秋です。世界の模範たらんとする日本の母性がまだこんな所でまごまごして居ては心細い。學校の先生にしても教室のみを教場と考へる偏見を一掃して生活即教育と認める要があります。そして教場は環境の全域だと解釋すべきです。

母の感激子の感激

人間が一生涯忘れない程強い感激を得たらそこから無限の教訓が得られます。

感激は人の心を緊張させ、奮發させます。確りしたスタートを切らせます。東京歌舞伎座前の日出壽司の女主人は、五十錢を資本に壽司屋を初めました。いくら物價の安い昔でも五十錢ではやりにくいのは當然です。思ひあまつて途方にくれて居ました。夕方何處からか一つの風船が軒先へ飛んできました。翌朝になるとそれが家の中の天井にくつついて居るのです。これを見た女主人は、風船でさへも上へ上へと揚るではないか。人間も努力すると浮び上がることが出来るに違ひないといつて、苦勞を嘗めつゝ一生懸命努力しました。今では數百人の人を置き、有數のデパートなどへ壽司を卸し、盛大なものだといふことです。

風船が遂に彼女をして今日の大をなさしめた感激の材料です。高が一個の風船です。

叩けば壊れます。しかしそれが感激となつた時にそれほど大きな方になるのです。

私は曩に「母の感激」と題する書物を出しました。母親に感激の材料をさしあげたいためです。實際今の世は感激に飢えて居ながら、感激を探し求める熱心に乏しいのではないかと思はれます。浮々して居たら三十年、五十年、七十年は東の間に過ぎ去つてゆきます。

感激は、賣つて居るものではありません。しかし心すれば、路傍にも、森にも、林にも、山にも、海にもあります。又鳥や獸から感激を得ることもできます。兩手を失つた大石よね子女史の如きは年十九歳の時旅役者として仙臺の旅館の椽先に居た一番のカナリヤを見て、天來の感激にうたれ、それから發心して口で文字を書く練習を初めました。精神一到何事か成らざらんやで、とうとう一生懸命に努力した結果、彼は口で立派に字も晝もかくようになりました。カナリヤから感激を得ることがなかつたから彼は今日尙ほ目に一丁字を解せず、自分の姓名すら書くことのできない境遇にあつた筈です。感激を一生得ないほどの人間ならとても新スタートを切ることはできません。人の子

の親として殊に母として子に臨むとき、何處から、何を、感激として深い印象を得させるかを宿題とすべきです。感激の中にも一時性や、永續性やその中間性のものがあります。心臓に焼印を押したほどの感激なら一生涯でもつゞきます。これなら非常に尊いのです。顔に白粉や紅をぬるほどの程度なら直ぐはがれてゆきます。

捨てらるゝもの

昔スバルタでは生児が弱かつたら谷へ、川へ、山へ捨てたと傳へられて居ます。随分な行爲だとも考へますが、しかし今日の聖代の御代に於ても平然とこれに近いことをして居ます。

「もう十分だと思つて居るのに又五人目の子ができた。これ以上は要らぬ。名も留吉だ。」

いくら留吉とつけても、名だけでは留まることも、留らぬこともある。これでは留吉

以後の子は生れぬ先きから殺されて居るのと同様です。それでも留らずに子が又生れて來たら

「今度は捨吉だ。」

名もあらうに、捨吉とは悲惨な名です。生れてから死ぬるまで一生捨吉では本人こそたまりません。結婚の式場でも、「新郎捨吉殿！」と呼ばれるのです。親は子一人を殺したのだと謂はれても仕方ありません。捨てたのは殺したのと同様です。

又よく観察すると親が實際肉體的に子を殺して居ることは今でも多くあります。貫以兒殺しの鬼婆など、言つて新聞に時々出て居ます。これは慾の深い老婆が養育料目當に貫以兒をして、これを榮養不良に陥れ、殺すのです。緩々殺すのです。所謂慢性殺人法を實行するのです。

さらに通俗的なのは多くの家庭に行はれて居る殺人法であつて、貫以兒殺しは意識的であり、これは無意識的です。この家庭的無意識的殺人法には急性も慢性も、その中間の悪急性もあります。

親の不注意で愛児を疫病にかけて死なせたら、急性の殺人法です。二階から落された赤坊がウンと言つたまゝ、氣絶して死んでしまつたらそれも急性殺人法です。不注意は故意でないにしても怠慢に基づいたので結果から見ると殺人になるのです。

榮養の方法に不注意があつて、それがため榮養不良に陥らせ何週か、何ヶ月で死なせたら、それは慢性殺人法です。

日本のコドモが私の所謂怠慢的殺人法、不注意殺人法、無智識殺人法などによつて生命をとられてゐるものがいくらあるか知れません。コドモの天國だと言はれて居る國に斯かる地獄があることをしつたら戦慄せざるを得ないではありませんか。

雷にそればかりではありません。「跛の子は仕方がない、捨て、置け」「啞の子は駄目だ、放つて置け」「算術ができなさや、物にならぬ構はずに置け」「聾だ、相手にするな。」斯う數へたら捨てられる少國民が澤山あります。嚴しく品定めをすると半數位になるかもしれません。あまり嚴選すると今度はひよつとすると親も捨てられる仲間入をしなければならぬかも知れません。

ところが世の中は妙なものです、例へば盲が盲を救ひ、吃が吃を救ふことが多いのです。天は實に細心の注意を拂つて人を救ふ工夫をして居ります。中村久子といふ兩手兩脚を失つた女性ほど多くの四肢の不具者に慰めを與へて居るかしれません。大石米子(順教尼)は四肢の不具者を收容して保護して居ます。米國の盲人ヘレン、ケラー女史は世界の盲人のために大きな社會事業をして居ます。

人の子はそう容易に捨てらるべきものではありません。神はいと貧しいものにも、富めるものにも、日を照らし、雨をふらして居ます。神の懷には強いものも、弱いものも、病めるものも一緒に住んで居るのです。坐席に上下の區別すら設けてありません。美人も、醜人も、色の白いのも、黒いのも、黄なのも皆一緒です。泥棒すらも神の懷では君子と聖人と内地雜居です。神の懷はげに廣いものと謂ふべきです。神の懷には蚊や、蚤のやうな小動物が居るかと思ふと、象も、虎も、鯨も住んで居ます。それでまだ餘裕があります。

神の懷は無限大です。神は低能兒だ、犯罪兒だ、浮浪兒だといつて無闇に捨てたり殺

したりはしません。一視同仁です。罪あるものにも、罪なきものにも同じ恵を與へるのです。

神は公平だ。人間は公平を口に唱へつゝ不公平を實行して而かも平氣です。

人間ほど物の價値を功利的に考へるものはないでせう。啞などに學資を入れても役に立たない、聾もそうだ、不具癱疾はもとよりと考へます。そんなお金があるなら商賣の資本にした方がどれほど効果的かしないと考へるのです。眼中利害のことの外にない人生はすべてこの調子です。近眼者流の人生觀はすべて眼前の利害によつて行動するのです。

近頃は學生や生徒に近眼が殖えてきましたが、人生哲學から見ても近視眼が殖えるやうです。盲の子を容易に捨てる親自らが強い近視眼になりもしくは哲學的の盲目者になつて居るのです。

「先生この旨は祖先の罪によりますか、それとも本人の罪のためですか。」とある人が聖者に尋ねました。すると聖者は即座に

「イヤイヤ、祖先の罪でも、本人の罪でもない。神の光を現はさんがためだ。」と答へられました。眼開きが罰當りのことを平氣でするうちに盲者は天の心、神の心を立派に發現させるのです。

ヘレン・ケラー女史を見てもこの意味は明です。彼女は盲で聾でありながら盲と聾と啞を救ひました。大きな光ではありませんか。神の光はかくして盲と聾と聾とからでも現れてゆくのです。

人間がものを悉く功利的に勘定したら靈の世界は零になります。人間の價も零になります。そして最後は神を泣かせることになるのです。貧しとて歎くに及ばぬ、地位がないとて恨むには及ばぬ。天の心、神佛の心を心として、日夜を過したら、それこそ大きな仕事です。斯く考へてくると世に捨てらるべき人間はなくなります。

七轉び八起き

人間は何べん轉んでも再び起き上る元氣が要ります。所謂七轉八起です。この剛健な精神が人間を成功させてゆくのです。

昔、英國にある一人の商人があつて、ふとしたことから失敗しました。丸裸になつたので非常に失望し、自分はもう再び世に立てない。もう駄目だと悲觀のどん底に落ちました。

すると妻君は

「何一つもないと仰言るが、それで、私の身體も債主へおやりになりましたの？」

ときくますから、主人は

「いや。」

「それでは子供は債主にとられますか。」

「いや。」

「それでは何一つないと仰言るが、第一良人があります。第二に私が、第三にコドモがあるぢやありませんか。」

「その通りぢや。」

「それならこの三人が一致協力したら、運命がまた拓かれますよ、一生懸命でやりませう。そんなに失望なさるには及びません。」

これを聞いた夫は

「なるほど家財は無くなつたが、大きな財産は我等親子三人だ。」

と言つて三人が協力して一生懸命に働きましたので、家運がだんだん拓け、後に成功しましたと申します。

加藤清正は意志の強い人でしたが或時他人から裸になつてしまつたらどうするかと尋ねられて、答へますには、

「自分が丸裸になつたら湯屋の三助になる。一生懸命に客の脊中を流し、それで餘裕が出来たら鎧や甲を買つて武士の弟子になり、後には立派な武士になつて見せる。」

と、痛快な心懸ではありませんか。人間は何か恐ろしい變動に逢ふと本心を失ひ、判断を誤り、もうこれで再び立てないと悲觀します。秀吉の如き有名な英雄豪傑でも氣をく

さらせることがあつたといひます。或時平素愛して居た庭前の老松の枯れかゝつたのを見て大層沈んで居ました。

すると例の曾呂利新左衛門がこれを聞き早速御前に伺候し

御祕藏のお庭の松は枯れにけりおのが齡を君にゆずりて

と一首の狂歌を献上しました。すると、秀吉は之を見て忽ち機嫌を取直し、老松のことを一切忘れたといふことであります。

「窮すれば通ず」と言ひます。人間はこの消息をしつて居て、たとひ日が暮れて道が遠くても今宵休んで明日はまた旅の道を行けば、必ずそこに進歩のあることを考へるので、人生は決して闇夜のみではありません。倦まず進らば遂に行きつくところへ達します。

ひがむな

日本では嫁と姑のいさかひがよく話題になります。もとはといへばほんの一寸したひがみから起るのが多いのです。ものは見方で善くもなり悪くもなります。善いと思へばだんだんよくなり、悪いと思へば皆悪くなるのです。

新夫婦の中には二世も三世も契つたものがあります。その相愛相思の仲でも一寸した誤解が本で、間もなく離縁することがあります。初め何かの理由で、夫が妻に對し嫉妬を起しそれが第一の印象になつて、すべての男を嫉妬の眼で見るとなると、後には八百屋の小僧と話を居ても、妻の行動が怪しいなどと言ひ出し、遂に夫と妻との間に大きな溝ができ、結婚後幾日ならずして早や「廻れ右」をすることになつたのです。かうなつては「高砂の尾の上の松も……」臺なしです。

ひがみはしみの蟲のやうなものです。初めは少しづつですが後には食つてしまひます。人間は物を見て見ません。

同じ一つのことでも、ひがんで見ると非常に悪いし、正しく見ると非常にいい。朗かな人生は物を曲げて見ません。

こゝに面白い話があります。

ある時米國の大學へ獨逸から哲學博士が參觀にくるといふので、茶目氣のたつぶりある米人は、片目の小使を啞だと詐らせました。それから、又小使に申しました。獨逸の博士は啞だから決して口でものを言つてはならない、すべて手眞似で話せとかたく命じました。獨逸の學者は參りました。室の中でその學者と小使とは頻りに手まねで話をして居ます。博士は一本の指を出しました。

小使はそれに對して二本の指を出しました。そこで博士は三本の指を出しました。小使は拳固をふりあげました。

博士は目禮して學長の室へ行き非常に感心しました。

その理由は斯うでしたと博士は申します。

「哲學の根本問題を出して萬物只一心、と一本指を出す、小使は二本指を出して天と地とにわけたらどうだと申しますので、それならいつそ天地人の三つとしてはと三本指を出しました。すると三體ありとも合して一つとなると拳固を出しました。實に偉い人物だ。」

小使はどう言つたか

「私は散々侮辱されました。私を見て、お前の眼は只一つと一本指を出しました。そこでなるほどあなたは眼が二つありますネと二本指を出す、二人で合せて三つしかない」と三本指を出すではありませんか、あまりのくやしさに拳固で一つなぐらうと思つたら、こそそこそあちらへ逃げてゆきました。」

哲學者はよく解釋し、小使は悪く解釋しました。同じ一つの事柄でも考へ方によつて善くも悪くもなるのです。同じことなら物事をすべて善意に解釋し朗かな人生を送りたいと思ひます。善意に解釋することは人にだまされる生活とは別です。

ある所に片眼の娘と知らずして結婚した男が居ました。三々九度の盃もすみ、一緒になつてみると、片眼なのです。夫は非常に驚きました。

すると新妻は卽座に

みめよきは夫のためにふため(二目)なり女房は家のかため(片目)なりけり

と詠みました。

夫はこの歌を聞いてなるほど感心しました。そして少しの風波も起らず、二人大層睦まじく暮し、その家庭はますます繁昌したと申します。

又こんな話があります。

或家へ元旦、早々其町の宗匠が年賀にゆきました。座敷へ通りますと、その床の間に雑巾が置いてありました。出て来た主人は縁起が悪いとして、女中を非常に叱り飛ばしました。宗匠は和歌の達人でしたから、「なにを仰言る。雑巾は目出度いのぢや。」と言つて次の和歌を主人に見せました。

雑巾を當字に書けば藏に金是は大方ふくもんであらう
と蔭で、しらけた場面は朗かになりました。

母となる人へ

母はコドモの血となり肉となり生命となるべき人でありませぬ。慈愛の雨を子に注ぐのが母に與へられた使命です。

幼な子時代は土か砂の時代です。一滴々々の雨が落ちますとよく浸み込みます。

母はこの雨となつて幼児の心に注がれてゆくのです。この意味から申して幼児の時代ほど母の感化の及びやすいときはありません。

母の慈愛は雨となつて、幼児の心に濕ひとなり、或時は涙の滴となつて、幼児の胸にしみ込んでゆくべきです。

幼児は母ほど大切なものを天地にもちませぬ。母は幼児のためには城であります。

青年期になると幼児期の砂地は岩になります。動もすると母の悪口を言ひます。母に反逆の弓をさへ引くことがあります。幼児時代の如く、母の慈愛の雨や涙が容易にしみ

込みません。そのみならず、注げば注ぐほど雨でも涙でもはね返してしまひます。石のやうに堅いからです。

此大切な幼児の時代をお母さん達は、本當によく認識して居るのでせうか。この時を惜いて他にこれ以上のいゝ時期がないのです。浮々とその日暮しをしてゐると永久に尊い日月を徒に過してしまひます。「三つ子の魂百まで」と昔から申して居ります。これが大切な點です。植物に例へて見ると、幼児は双葉の時代です。この時から巧に培養すれば、空の鳥を宿すほどの亭々たる大木ともなり得るのです。もしこれを盆栽にしますと、三年、五年、十年経つても一尺か一尺五寸の曲りくねつた木に過ぎません。

日本では盆栽を愛翫いたしますが、私はコドモの成育を聯想して、悲しくなりますので、盆栽式の植物をあまり好みません。

慈愛の雨と涙を幼児の胸に注ぐには母自らの覺悟と態度とが大切です。幼稚園へゆきさへすればやれ／＼、せめて留守の間だけでも助かるなど、考へたら大問題です。どうすれば、母は我が子に慈愛の雨をしみこませ得るかを考へなければなりません。

第一に幼児のために最善の方法を母の手で實行するのです。命令ではありません。最善の方法と甘やかしの方法とを混同さるべきではありません。

第二には徹底することです。眞剣でなければだめです。口先のみ訓戒であつたり、號令であつたりしては役立ちません。叱る言葉の多少によつて、躰け方の結果が左右されるなど、考へたらもつての外です。

母が子を思つて眞剣になつたら、雄辯な母の小言など、夢にも口に出るものではありません。音無言の涙です。

第三に母は子の手本になることを忘れてはなりません。「その子を知らざれば、其母を見よ」と言ひます。母は子の鑑とならねばなりません。母の善行が子の善行になるのです。

第四には、子のために念願する母の心根がほしいのです。眠れる子のために祈り、遊んで居る子のために祈り、留守の子のために祈る心が母に缺けてはなりません。

雨につけ風につけ我が子のために祈る涙の雫が子の胸に注がれたら、いつまでも母は

子の懐に宿ることが出来ます。

[5]

昭和十五年十二月五日 印刷
昭和十五年十二月十二日 發行

不許
複製

女性に送る

定價五拾錢

著者 三田谷 啓

發行者 東京市神田區神保町一ノ一
株式會社 同文館 森山章雄

印刷者 東京市本所區東駒形三ノ十
文化印刷株式會社 西野末雄

東京市小石川區春日町一ノ一
株式會社 同文館出版部
振替口座東京一三五番

— 三田谷女性 —

岡邦俊著

宗教概論

四三六頁判
價一・二〇
送・八〇

岡玄にして神聖なる宗教の殿堂、宗教こそは眞に人生究竟の理念である。本書は宗教の如何なるものかを學的に研究せんとする人々にとつて無二の寶典である。

三室玄道著

念佛の人生觀

四二六頁判
價一・二〇
送・五〇

現代人の生活の基礎を確乎不動のものたらしめる指導原理、それこそは念佛である。力強い日本人として立上らんとする者は來りて先づ著者の獅子吼をきけ。

伊福部隆彦著

無爲の人生觀

四二六頁判
價一・二〇
送・五〇

「無爲の眞道」古哲老子の打建てたこの輝かしき聖道。著者はこの聖道に依る眞實の生活のよるこびを剩すところなく語らんとする。

江部鴨村著

信心銘講義

四二六頁判
價一・二〇
送・二〇

信心銘は禪宗第三祖僧璨の作である。四句一偈を以て成り、克く簡潔に人生の要諦を説く。江部先生の講解又平易明快、現下國民の腹を作るに是非一讀を乞ふ次第である。

佛敎思想物語

四二六頁判
價一・二〇
送・二〇

現代人のものとするに從來の佛敎書はあまりにも難解すぎた、本書は現代人のものとしての佛敎を平明にしかもその本旨を過ることなく説かれたもの。

409
360

終



¥0.50